

石原純、原阿佐緒不倫事件と「アララギ」 : 大正期「アララギ」裏面史(1)

千野, 明日香

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

72

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

13

(発行年 / Year)

2005-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010095>

〈論文〉

石原純、原阿佐緒不倫事件と「アララギ」

—大正期「アララギ」裏面史(一)—

大正10年(1921)7月30日、東京朝日、読売新聞等で、石原純と原阿佐緒の不倫事件が報道された。「妖婦」原阿佐緒が、東北帝国大学物理学教授石原純を誘惑し、恋に落ちた純が大学へ辞表を出すに至ったというのだ。後年の阿佐緒のことばを借りれば、「一世に悪名をとろかすような」スキャンダル報道だった。

純は、理論物理学者、アインシュタインの相対性理論の紹介者として知られ、家庭には、妻と五人の子どもがいた。阿佐緒は、華やかな美貌と複雑な性格がもたらす特異な恋愛遍歴の持ち主で、二度の離婚歴があり、父親の違う二人の息子がいた。

純と阿佐緒はともに「アララギ」に属する歌人だったが、純が高名な学者だったためか、阿佐緒は誘惑者として一方的に誹謗中傷された。しかし、現実には、被害者は阿佐緒だった。

純は、今でいうストーリー的存在で、夜中に突然阿佐緒の家に現れたり、自殺未遂をしたりして、執拗に阿佐緒を追った。

千野 明日香

そのため、根負けした阿佐緒は、やむなく求愛を受けいれたらしい。阿佐緒は、この事件がきっかけで「アララギ」を追われた。

事件は、当事者だけに止まらず、「アララギ」内部の人間関係や、歌壇全体に大きな影響をおよぼした。

しかし、事件に直接かわった島木赤彦、斎藤茂吉、古泉千樫^{ちかし}など「アララギ」の関係者たちは、事件や、事件が引きおこした影響について、表だって語ることはなかった。むしろ、人間関係や、個人的な名譽^{めいよ}が傷つくのを恐れて、意識的に韜晦^{たうかい}したり、沈黙を守ったりした。

そのため、事件の経過も含め、大正13年4月(1924)創刊の『日光』にいたる、大正後期の歌壇の情況が、誤解されたり、空白になったりしている。

第一に、三ヶ島^{みかじま}葭子^{よしこ}は親友阿佐緒をかばったため赤彦から破門されたといわれる。しかし、これは、事実と異なる。

第二に、『日光』と事件のつながりである。『日光』は、北原白秋をはじめ、当時の有力歌人が結集し、「アララギ」からも古泉千樫、三ヶ島霞子、石原純、原阿佐緒、釈迢空（折口信夫）が参加したため、反「アララギ」の陣地とみなされた。千樫は、『日光』に参加したことで「アララギ」を離れたとされているが、実際は、この事件が原因で、「アララギ」を追われた。また、この事件が、『日光』創刊を促す、かくれた要因であったことも見のがせない。

これら一連のできごとは、「アララギ」の、門人グループ内の世論と関係があった。当時、茂吉と千樫の二人に師事した杉浦翠子は、つぎのように書いている。

「大体その当時はアララギの中でも、おのおの師事する人が違つてゐた。赤彦の弟子たちを『発行所側』と名づけ折口信夫の弟子たちを『国學院側』と名づけ、その他『古泉側』もあつた。ところが勿論発行所側が一番多数であるし、大変な勢力でもあつた」。

赤彦の門人グループである『発行所側』は、赤彦が、「アララギ」の責任者だったため、編集発行の実務をこなす立場にあった。

この稿では、まず、三ヶ島霞子と事件のかかわり、つぎに古泉千樫と事件のかかわりを述べ、そのことを『発行所側』の動向と関係づけて、考えてみたい。

1. 三ヶ島霞子と阿佐緒の友情

三ヶ島霞子（明治19年（1886）—昭和2年（1927））は、家庭内の不幸を背景とした、内省的な短歌で知られる。はじめ与謝野晶子に師事したが、阿佐緒に誘われて、大正5年（1916）、「アララギ」の島木赤彦門下に入った。

霞子は、夫の倉片寛（くらかたかん）とともに、大正3年（1914）から阿佐緒と家族ぐるみのつきあいをしていた。同じ「アララギ」同人だったため、阿佐緒と純の双方の相談にのる形で、ふたりと深くかかわってきた。

霞子が、新聞報道後、「妖婦」呼ばわりされた阿佐緒をかばうため、婦人雑誌『新家庭』、『婦人公論』に、「事実を闡明す」「生けるもの、悲しみ」の二文を発表し、そのために、島木赤彦の怒りをもって「アララギ」を破門されたという友情「美談」は、今日すでに定説化している。

この「美談」は、橋本徳寿が、昭和23年（1948）、つぎのように書いたことで定着したものでしょう。

「委細を知つてゐる霞子は阿佐緒のために敢然と筆をとつた。それが大正十年五月号の（ママ）『婦人公論』に出た。それは事実を書いたのだが、博士に有利な文章ではなかつた。この執筆公表が師島木赤彦のいかりにふれて破門され、アララギを退会させられてしまつた」。

徳寿は、霞子の夫、倉片寛一の同僚で、霞子とは大正6年（1917）から面識があったという。しかし、同僚の妻というだけで、「霞子とは歌のうの字も話合ったことがな」く、内情を知る立場ではなかった。

現在も、諸家はみな徳寿の説を踏襲している。たとえば、秋山佐和子は、霞子が婦人雑誌に文章を発表した動機について、つぎのように書いている。

「霞子は、婦人雑誌からこの事件について文章を頼まれた時、阿佐緒を世間から守らねば、という一心で承諾した。自分が言わなくて誰が、という義侠心も働いたであろう。」^{注5}

筆者は、霞子と阿佐緒の間に友情が存在したことを疑うものではない。また、霞子の発表した文章が、阿佐緒にとって有利な内容であったことを否定するものでもない。

後年、阿佐緒自身も、「婦人公論に霞子さんの書かれた、石原とのトラブルの真相は、石原側の関係者たちには、決していさぎよしとしないものではあつたらう。だから、赤彦先生の忌諱に触れたことも解る」と書いている。^{注6}

しかし、詳細に読むと、霞子の文章は、単に阿佐緒を弁護するために発表されたとは考えにくい。「事実を闡明す」の冒頭は、つぎのように始まる。

「こんど石原先生と原さんのことが諸新聞に発表されるやうになつてから、この事件の關係者として私も大分誤解を受

けてゐるやうです。それといふのも事実の真相がわからずにあるためですから出来るだけの範囲で事実を闡明して、受くべきものは受けたく返すべきものは返へしたいと思ひます。」（傍点筆者）

霞子は、「誤解を受けている私」、つまり霞子自身のために事実を「闡明」し、「受くべきものは受け返すべきものは返へしたい」と言っているのだ。

これをすなおに読めば、霞子の目的は、自分自身が受けた「誤解」を解くためにあることになる。霞子が、「誤解」について、「受くべきものは受け」と、自分にも非がある、という書き方をしているのに注意すべきだろう。完全な濡れ衣であるなら、断固否定していてもおかしくない。霞子のいう「誤解」とは、何だったのだろう。^{注7}

「誤解」の内容については、むしろ、「生けるもの、悲しみ」の方が、分かりやすい。

「原さんは去年（大正9年・1920）の秋上京した時からこの六月のはじめ郷里へ帰られるまで大方私のところに居つたのですから、先生も上京するたびに私のところへ来られました。それについて私が原さんと石原先生をとりもつたといふようなことを言ふ人もあるさうですから、私はすべてを闡明して自分の受くべきものは受けたいと思ひました。」（傍点筆者）

石原純、原阿佐緒不倫事件と「アララギ」

葎子は、純と阿佐緒を「とりもつた」、つまり、ふたりを積極的に結びつけたという「誤解」を、「闡明」して、解きたいと願っている。

葎子のいうこの「誤解」は、どのようないきさつから生じたのだろうか。葎子とこの事件のかかわりについて、葎子の娘、倉片みなみ編の「三ヶ島葎子年譜」^(注8)、小野勝美編「原阿佐緒年譜」^(注9)、村山磐編「石原純略年譜」^(注10)、阿佐緒の自伝小説『黒い絵具』——ささやかなる自伝に代えて——(以下、『黒い絵具』と略称)などにもとづき、考えてみたい。

2. 大正10年の新聞報道まで

阿佐緒は、宮城県黒川郡宮床村の豪農の家に生まれたが、最初の結婚に破れ、その後婚をとる形で庄子勇と再婚した(大正8年7月(1919)に離婚)。二度の結婚で、千秋、保美という二人の息子を生んでいる。

阿佐緒と純がはじめて顔をあわせたのは、大正6年12月(1917)らしい。阿佐緒が、「異常妊娠」で、仙台の東北帝国大学医科大学病院に入院中、同じ「アララギ」の関係者として、東北帝国大学教授の純が見舞いに訪れたのが最初だった。

その後、純は阿佐緒に恋愛感情を持ち、一方的な求愛を繰り返すようになる。

大正8年4月(1919)、長男千秋の中学進学により、阿佐緒が息子とともに仙台に出て、借家住まいを始めると、純は、しばしば阿佐緒のもとを訪れる。しかし、阿佐緒が求愛を受け

いれなかったため、大正9年3月(1920)には、自殺未遂をしたという。

大正9年10月21日(1920)、純の求愛からのがれるため、阿佐緒は長男千秋を文学上の友人早坂掬紫に預けて上京、麻布谷町の三ヶ島葎子の家に同居した(この同居は、翌10年5月初めまで続いた)。

当時、葎子の夫倉片寛一は、『水産新報』経営のため、大阪に長期出張中で、東京大阪間を往復していた。ふだん、葎子はひとり暮らしだったため、阿佐緒が同居することができたわけだが、阿佐緒と純の問題については、葎子だけでなく、夫婦で相談にのっていたようだ。

葎子と倉片は、純の気持ちを尊重し、気の進まぬ阿佐緒を、純に添わせようとしたらしい。そのことは、倉片自身が、阿佐緒の次男である原保美の夫人、原桃子に語っている。

「石原さんは、阿佐緒さんが自分のところへ来てくれなければ死ぬと言って、梁に帯を掛けて、首を吊って一度は息が絶えたんですよ。石原さんといったら、そのころ社会的にも学問的にも大変高い地位にあった偉い人だったから大変なことだと、葎子と僕とが阿佐緒さんに、ともかく石原さんのところに行くことを承知したらと言った。」(傍点筆者)^(注12)

倉片と葎子が、純の気持ちに阿佐緒を添わせようとするようすは、阿佐緒の自伝小説『黒い絵具』の中では、つぎのように描かれる。純が上京、葎子の家を訪れたときの描写である。

（文中の久和子は阿佐緒、島より子は三ヶ島葎子、賢二は葎子の夫倉片寛一の仮名。このとき、倉片は、大阪から帰宅している。原田阿紀良は石原純の仮名。純は本名純。『あきら』の仮名は「あつし」に似せている）。

「島より子（葎子、倉片）夫婦が、突然の阿紀良（純）の来訪を、心から喜んでいるようなのが、久和子（阿佐緒）には何か不安な気がされてならないのだった。賢二（倉片）はことにも阿紀良に愛想よく話していたが、急に何か思いついたように、『原田先生（純）、ほんとうにいい処へいらして下さった。僕も久しぶりで東京へ帰ったので、今日は夫婦で出かけなければならぬ処があるのですが、久和さん一人おいてゆくのも可哀そうだと思っていた処に、先生がお見えになったのは何よりのことですな。すみませんが、一つ、先生に久和さんを願うことにしましょう。なあ、より子』『え、そうお願い出来ればね』そう言って二人（葎子、倉片）は微笑ましい眼を見交わした。」

この後、久和子（阿佐緒）は、島より子（葎子）夫婦に、原田（純）とふたりきりで取りのこされる。

倉片と葎子の説得のようは、『黒い絵具』の別の場面では、もっと率直に描かれている。（文中の小山は当時の阿佐緒の愛人、真山孝治の仮名）。

「（略）しかしな、真面目な話をしようよ。お前さん（阿佐

緒）、小山さん（真山孝治）のどこがそんなに好きなんだい……。え、原田先生（純）の方がいいじゃないか……。第一、可哀そうだよ。より子（葎子）もそう言ってるぜ。どうだ、一つがんばって先生に安心したら……。うん？何といったって行く処までゆかなきゃ解決つくまいよ……」賢二（倉片）は床の中ではあるが、意外に真面目に言うので、久和子（阿佐緒）もちよつと返答に困った。」

倉片自身が阿佐緒への説得を認めていること、小説とはいえ『黒い絵具』の記述の多くが年譜の事項と一致することから、少なくとも葎子夫婦が純に協力的であったことは、否定できないだろう。

葎子夫婦という同情者を得て、純は勢いづいたにちがいない。「三ヶ島葎子年譜」によると、その年の12月、

「純は相対性原理講演のため京都帝国大学に招かれたが、追行するはずであった阿佐緒が約を破ったため、純は大阪に倉片を訪い懇請した。倉片はこれに応えて葎子に対し阿佐緒を同伴すべしと打電してきた。そこで葎子は阿佐緒をつれて西下し、純、阿佐緒は三本木の『信楽⁴¹³』に、自分は倉片の寓居（大阪市北区梅田の水産新報社の二階）に二週間滞在する」（傍点筆者）とある。

倉片と葎子が純との約束をやぶり、京都に行こうとしなかった阿佐緒を説得して、純のもとへ連れていった様子が伺える。こ

石原純、原阿佐緒不倫事件と「アララギ」

のときの阿佐緒の様子は、葎子の歌にも詠まれている。

停車場に向ひて急ぐ今にして友はこころの引き立たぬらし
 (「アララギ」大正10年(1921)2月号)

親友夫妻の勧めを拒みきれなかったのだろう。京都で阿佐緒は折れ、純と深い仲になる。そのまようを、橋本徳寿はこう書いている。

その夜石原博士は永年のおもひをやつと遂げたのであった。ことが終わつてから博士は蒲団の上にかしこまり、両手について『どうも有難うございました』と阿佐緒にふかくお辞儀をした。(その時の模様を阿佐緒は葎子に委しく話した。葎子からそれを話された私は深い感動に打たれた。^(注15))

京都旅行後、阿佐緒は軟化し、大正10年2月末に、純と三ヶ島宅で同棲生活に入る。

阿佐緒は、「やがて、私を追つて、石原が葎子さんの家に来た」と書いている。このふたりの同棲が、同年7月に、新聞で報道される起因となった。

3. 葎子の破門

不倫「事件」は、葎子夫婦の、純への協力がなければ起こら

なかったかもしれない。

葎子が夫とともに、気のすすまぬ阿佐緒を説得して純の意に添わせた、というのは事実であり、そのことが、「原さんと石原先生をとりもつた」と、「誤解」されたわけである。葎子が、「事実を闡明す」の中で「受くべきものは受け」と、半分「誤解」を認める書き方をしているのは、そのせいだろう。

しかし、葎子は、「返すべきものは返へしたい」とも書いている。葎子は、何を「返へし」たかったのだろうか。

「とりもつた」という嫌疑についてだろう。この「とりもつた」という言葉は、阿佐緒が自分から純を誘惑しようとして、葎子に協力させ、世間知らずの純をとらえた、という文脈で使われたことばであろう。この意味なら、葎子は、二人をとりもつたのではなかった。

当時の「アララギ」関係者たちは、純に責任は無い、と考えていたようだ。

なぜなら、新聞報道後、阿佐緒は「アララギ」から追われるが、純は追われていない。赤彦は純に、今後も「アララギ」に歌を寄せるように勧める手紙を出しているし、翌年の大正11年(1921)5月には、「アララギ叢書」14編として、平福百穂^{ひらふくもくすい}装丁で、純の歌集『霰日^{あいにじ}』が出されている。「アララギ」にはこの歌集の広告も載せられ、純に対する態度の変化は感じられない。

純に寄せられたのは、非難ではなく、同情だったのだ。その情況は、歌からも伺うことができる。

中村憲吉は「大きな道にありける人の今にして恋のまどひに遇

ひにけるかも」「珠のごと人を惜しみて云ふ友の面になしき憤りあり」と詠んでいる。純は、「大き道にある」「珠のごとき人」として惜しまれていたのだ。

男尊女卑の価値観が強かった時代、新聞報道を読んだだけの一般人が阿佐緒を「妖婦」だと考えたのはある意味で理解できる。しかし、事情を知る立場にあり、当時の知識人でもあった「アララギ」関係者の判断も、一般の人々と変わりがなかった。赤彦、茂吉など「アララギ」関係者は、純が葎子の家に泊まりこんでいることを知ると、日参して純に忠告した。しかし、純は聞きいれなかった。

葎子と倉片は、「アララギ」関係者たちの眼に、どのように映ったのだろうか。

茂吉門下の杉浦翠子は、石原純、原阿佐緒の恋愛事件をモデルにして「創作——愛しき歌人の群」を書いたが、小説中で、房代（阿佐緒の仮名）たちは、敏子（葎子の仮名）の家を「隠れ家」にして、泊まりこんでいると書いている。純が、葎子の家に押しかけたというのが実情だろうが、葎子は、ふたりに、積極的に「隠れ家」を提供した、と考えられていたようだ。

「アララギ」関係者たちは、阿佐緒と別れようとしないうちに困惑し、葎子に怒りを感じていたらしい。斎藤茂吉は、中村憲吉に宛てた手紙で、つぎのように書いている。

「(略) 理博士が入院中麻布の□□□(削除・三ヶ島)の処へやつた手紙二通を借りてゐたのははじめて昨夜読んだ。借りたのは一ヶ月前だが、何だか恐ろしいもの、きたない

ものでものぞくやうで、今までうつちやつてゐたのだ。ゆうべ一人でしみじみ読んで、理博士が赤彦の意見に反感して、それを□□□(削除・三ヶ島)に懇いて(略)その文章を読んで、友情の如何に果敢無きものなるかを見、愁然として涙が湧いた。(略) (大正10年5月15日) (注、理博士は純のこと)。

茂吉の、「恐ろしいもの、きたないものでものぞくやうで」ということはには、葎子と阿佐緒たちに対する嫌悪感がにじんでいる。

阿佐緒は悪者であり、葎子は、阿佐緒と純との間を「とりもつた」うえ、「隠れ家」を提供した人物として、憲吉のいう、「かなしき憤り」の矢面に立たされたとみられる。

葎子にしてみれば、これは思いもよらぬ事態だったにちがいない。

大正9年(1920)10月21日の、阿佐緒の上京にしても、葎子は、「七日か十日気晴らしのために来るのだらうと思つていた」のに、阿佐緒が、「本から鏡台から一切持つてきたのにびつくり」(「事実を闡明す」)したと書いている。

葎子夫婦は、純が、一度自殺未遂をしたことで、本当に自殺してしまふのを恐れ、阿佐緒と純の双方の相談にのるうち、問題に巻きこまれていったというのが実情だろう。

葎子が「事実を闡明す」「生けるもの、悲しみ」で書きたかったのは、このような情況への釈明だったと考えられる。だからこそ、葎子は、阿佐緒が純の執拗な求愛から逃れようとし

石原純、原阿佐緒不倫事件と「アララギ」

たいきさつと、阿佐緒の愛人の存在を述べ、阿佐緒が一方的に非難される不合理を主張した。これは、親友のためでもあるが、むしろ、二人をとりもったとされる自分を弁護するためだった。

「原さんを特別に悪い女のやうに言ひたてて学者として世間馴れない先生がそれに誘惑されるのは当然なことだと言はぬばかりに先生の恋を全然過失視し、先生をあり来たりの学者型に押し込め、先生に対し、無理な弁護をしようとする」〔事実を闡明す〕

反面、葦子は、阿佐緒を連れて京都へ行つたいきさつは一切書いていない。「とりもつた」という嫌疑は濡れ衣にしても、純の気持ちを尊重し、阿佐緒の気持ちを押さえつけたという点は事実なので、書くことができなかったのだろう。むしろ、言い訳のことばがめだつ。

「私は原さんと一しよにあるやうになつてからは朝夕の食事のことなどに心を囚はれてしまつて原さんの心の煩悶について考へさせていたゞくほどの余裕も無かつたのです。私はさういふ目前のことにはかり心を支配されなければならぬ自分の弱点からどうしても逃れることが出来ないために、何でもいから早く原さんの生活にきまりがついて自分分は自分、原さんは原さんで生活したいといふことを思ふやうになりました。」

うつし世はかなしかりともしまらくはこのなれより命つがましを

といふやうな至純な心で私も（ママ）頼つて来られた原さんに対して私の心はあまり冷酷でした。」〔事実を闡明す〕

素封家のひとり娘だった阿佐緒は、家事が不得手だったという。病身の葦子は、食事の世話など、純と阿佐緒との同居生活に疲れはてたのではないだろうか。

葦子は、師赤彦から大正10年（1921）9月16日付けの手紙を受けとる。

「（略）御歌近頃より小生拝見してよきか如何かと思ひ居り今日にてはどうも責任を以て拝見の勇氣出でず此儀甚如何かと存じ候へば当分小生拝見の責を御免除下され度（略）」

歌稿を返送するという内容だが、これは現実には破門を意味した。

葦子は、赤彦へ10月10日付けで返事の手紙を出している。この手紙は、これまで、権力者に対して、も「毅然とした、言うべきことをきちんとという」葦子の名文といわれてきたが、実際には、葦子が、赤彦に対して非を認めた手紙であろう。

「私が近頃友人原阿佐緒さまと近しくしながら、真実を尽くさなかつたことなどが先生の御心を傷けた原因かとお察し申

すのでございますがそれでしたら全く私の至らなかつたためです。先生に一方ならぬ御心配をおかけ申したことを今更何とも申わけなく存じてをります」(傍点筆者)

「真実を尽くさなかつた」という言い方は、純をたてて、阿佐緒の気持ちを尊重しなかつた京都行きのことを意味するだろう。

4. 古泉千樞と霞子

「アララギ」内部で、ひとり霞子と阿佐緒の味方となつたのが、古泉千樞である。

千樞は、大正2年(1913)、師の伊藤左千夫死後、「アララギ」の編集を担当したこともある幹部同人だった。この千樞も、不倫事件にかかわつたことが、「アララギ」を追われる原因となつた。

千樞はかつて阿佐緒と恋愛関係にあった。そのためか、純との問題で、阿佐緒に同情的な立場をとつた。

大正9年6月11日(1920)付けの手紙で、千樞は純との問題で悩む阿佐緒に、助力を申し出ており、「お互にもし出来るなら本当に心の相談が出来るような力になり得るような友人になりたいと思ひます」と書いている。^(注20)

その後、千樞は、霞子の家をしばしば訪れ、相談にのつた。かつて阿佐緒の恋人であつた千樞が、純との問題にかかわりあつたことは、他の「アララギ」関係者の疑念と不信を引きお

こした。

茂吉から純に宛てた手紙に、「大兄の一挙一動は阿佐緒さんを通じて古泉君の方に通信されあり、何のための通信か、小生らはそれを古泉君の口より聞くことを欲せず」(大正10年8月1日(1921)付け)とある。^(注22)

また、赤彦から平福百穂に宛てた手紙には、千樞は「とに角、三ヶ島の言ふ所とそつくり同じことを言つてるので、始末にならず仕方なく候」(傍点筆者)(大正10年3月26日(1921)付け)、とか、「斯くの如き人(千樞を指す)と交際する恐ろしさを痛感致し居り候」(大正10年4月30日(1921)付け)などである。^(注23)

大正12年(1923)、千樞は、国學院大學で宿直をしていた釈迦空を訪れ、純と阿佐緒の問題から、「アララギ」を離れることになつたいきさつを打ちあけている。

「あららぎにおいて、石原さんとはもとより、この女性(阿佐緒を指す)にも心安かつたのは千樞であつた。それで千樞が両者の間をとりなしたといふやうな考へ方が出て来て、あら、ぎ同人で、又先輩であつた人の生活を、良い方から、俄に踵を廻らすやうな状態に立ち到らしたといふ風に解釈されて、この断ち難い関係を持つた石原・古泉両氏があら、ぎを去つて行つた。」(傍点筆者)^(注24)

霞子は、純と阿佐緒を「とりもつた」、千樞は、「とりなした」ことになつている。つまり、『発行所側』が霞子と千樞にかけ

石原純、原阿佐緒不倫事件と「アララギ」

た嫌疑は、同じ内容だったのだ。

千樫が「アララギ」から離れた原因について、田中順二は、赤彦の師弟勢力と千樫のあつれきを挙げる。しかし、千樫が、不倫事件の画策者という濡れ衣をさせられ、非難された、と釈道空に打ちあげたことにはふれていない。^(注25)

当時「アララギ」で千樫の門人だった鈴木杏村も、こういう内輪の事情は聞かされておらず、「はつきりした事情を知らない」という。だが、杏村は「アララギ」の多数派、いわゆる『発行所側』の空気について、書き残している。

「僕は千樫に伴われて七月三十日（大正11年（1922））、亀戸の普門院にあった『左千夫忌歌会』に出席した。赤彦の門下の人達が太へん幅を利かせ、千樫の歌がその席上で高田浪吉から、ひどく叩かれてしまった。浪吉の口吻にはただ作品に対する非難ばかりでなく、千樫の人間への攻撃がふくまれていたような気がした」^(注26)。

赤彦は「鍛錬道」を提唱し、作者の生き方の倫理性が作品評價の場に持ち込まれる傾向があった。蔑子の相談相手となり、赤彦と対立した千樫が、人格面の攻撃にさらされたことは、容易に想像できる。

高田浪吉は、木曾馬吉（藤沢古実）、竹尾忠吉と並ぶ赤彦門下「三吉」のひとりで、『発行所側』の代表的人物だった。

杏村によると、千樫は、その晩、かつて見たことがないほど醜陋したという。おそらく、蔑子も破門される前は同じような

攻撃にさらされたにちがいない。

「三ヶ島蔑子年譜」によると、大正10年（1921）「この問題に関し斎藤茂吉は稍寛容な態度をとり、古泉千樫は最も同情的な態度をとっていたので、ここに転じて千樫の門に入った」とある。

現実には、そのような穏やかな状況ではなく、茂吉の見方が他の同人と大差なかったことは、上述した通りである。蔑子が千樫門下に入ったのは、個人攻撃にさらされた、千樫と蔑子が、「アララギ」に居場所を失いつつも、同志的に結びついてゆくひとつの過程だったに違いない。

阿佐緒と千樫の関係、大正13年（1924）の『日光』創刊の状況については、次稿にゆずりたい。

（注1） 杉浦翠子『純愛三十年斎藤茂吉の手紙』折口書店・1954年4月9日

（注2） 「事実を闡明す」は、婦人雑誌『新家庭』（第6巻9号・大正10年9月1日）の特集、「石原博士の恋愛問題」のなかの一文。また、「生けるもの、悲しみ」は、『婦人公論』（第6年第10号・大正10年9月）の特集「石原博士と原阿佐緒女史 学者の詩・詩人の恋」のなかの一文。

（注3） 『三ヶ島蔑子歌集』（創元社・1948年7月25日）「解説」橋本徳寿

（注4） 『古泉千樫とその歌』三省堂・1939年11月10日

（注5） 『歌ひつくさば許されむかも——歌人三ヶ島蔑子の生涯』TBSブリタニカ・2002年8月8日

(注6) 『短歌研究』(11巻8号・1954年8月1日)、原阿佐緒

「回想の三ヶ島霞子」

(注7) 二文は、同じ事件について、同じ時期に書かれた文章なので、付き合わせてみると、霞子の言わんとすることが浮かびあがってくる。「誤解」について、「事実を闡明す」では、「けれど何の資力もない私には原さんの心として(ママ) 左右することは出来ませんでした。原さんこそさぞ苦しんでゐるのだからと私は原さんの心の動くままに傍観してゐるより仕方ありませんでした。それに私は非常に気の小さい人間でしたから原さんに對しても、又原さんを訪ねて来る人の誰に對しても、その場に於て先方の心を反らすまいとすることにのみ心を奪はれてゐましたから、その点で意外の誤解を受けてゐること、思ひますがどうもよんどころありません。」という形で出てくる。「誤解」が何を指すかは分かりにくいですが、「その場に於て先方の心を反らすまいとする」というのは、石原純の気持ち尊重した、という意味だろう。

(注8) 倉片みなみ編『定本三ヶ島霞子全歌集』短歌新聞社・1993年3月26日。霞子の日記(『三ヶ島霞子日記上・下』至芸出版・1981年4月15日)も倉片みなみによつて公刊されているが、惜しいことに、大正9年6月8日以降は失われており、大正10年7月の新聞報道へ至る、霞子と倉片の心の動きや行動の、核心的な部分は何うことができない。

(注9) 『涙痕——原阿佐緒の生涯』至芸出版・1995年6月16日

(注10) 『石原純と原阿佐緒——恋の顛末』(耕風社・1997年

6月25日)。和田耕作『石原純——科学と短歌の人生』(PHN・2003年8月1日)に、「石原純自筆年譜」があるが、純は霞子との関係にはあれていない。

(注11) 1927年1月から12月まで11回にわたり『婦人公論』に連載。1997年8月10日、同名書が耕風社より「みやぎ文学館シリーズ」の一冊として出された。

(注12) 『生誕百年記念原阿佐緒』(原阿佐緒記念館・1988年10月25日初版、1996年11月29日3刷)。「黒い絵具」の中では、純は、首を吊つたのではなく、腰ひもで自分の首をしめたことになっている。

(注13) 『信楽』は、京都市内鴨川沿いの旅館。

(注14) 『短歌研究』(28巻9号・1971年9月)、橋本徳寿「あのころそのころ5」

(注15) 注6前掲書

(注16) 『しがらみ』『アララギ叢書15』(岩波書店・1924年7月)、大正10年「人を惜しむ」

(注17) 福永書店・1927年

(注18) 『斎藤茂吉全集33』『書簡(1) 907』岩波書店・1974年11月13日

(注19) 『三ヶ島霞子年譜』では、「この問題に関し斎藤茂吉は稍寛容な態度をとり」とあるが、茂吉の嫌悪感実は大変強く、そのことが他の同人にも影響を与えた可能性はある。茂吉は、阿佐緒をひきあいに「女の恐ろしさ」について、終生、次男の北杜夫に語つたという。(『青年茂吉』

岩波書店・1991年6月27日)

(注20) 注5前掲書

(注21) 橋本徳寿『アララギ交遊編年考3』至芸出版社・1998

石原純、原阿佐緒不倫事件と「アララギ」

4年10月25日

(注22) 注18前掲書

(注23) 『赤彦全集8』岩波書店・1930年10月15日初版・1969年12月24日再版

(注24) 『折口信夫全集26巻歌論歌話篇2』中公文庫・1976年6月10日所収「自歌自註」

(注25) 田中順二「古泉千樫とアララギ」(『同志社女子大学学術研究年報』昭和36年度・1961年12月20日)は、千樫が「アララギ」を離れた理由について取りあげた論文である。注6「回想の三ヶ島霞子」で、阿佐緒は、霞子の破門について「私は古泉先生から、『ありやあね、赤彦が、一緒にいつた友達の不幸を知らぬ顔に、つづけてアララギへ発表するなんて、僕は、きらひなんだ』と云ふんだよ」と聞いて私はあらためて驚いた」と書いている。赤彦は、霞子が純と阿佐緒を近づけたから破門したわけだが、千樫に対しては、破門の理由を韜晦したことが分かる。この事件について、赤彦は、相手によって言うことを変えている。『古泉千樫聞書附千樫日記』短歌新聞社・1974年5月15日。文中に「弟子入りしてから五年間」とある。鈴木杏村の入門は大正6年。「アララギ」(大正11年9月1日発行)で左千夫忌歌会の歌を見ると、岡麓以外はすべて赤彦風の叙景歌で、千樫の歌だけが異色である。「まづしさに堪ふるこころも吾になくただになまけて年すぎにけり」。歌の弱々しさからみて、千樫はこの当時精神的に相当追いつめられていたと思われる。

(せんの あすか・文学部教授)